

人類学における研究支援環境としてのデジタルワークベンチ

本村 康哲^{†1} 川上 聡^{†2} 川村 清志^{†3}
森下 淳也^{†2} 大崎 雅一^{†4}

文化人類学と民俗学におけるフィールドワークと民族誌編纂をめぐるのは、1980年代以後、調査者の視点に特化した民族誌に対する批判が繰り広げられた。この問題は調査資料の解釈の妥当性に対する疑問に起因しているが、これを検証する手段は現在のところ確立されていない。この問題を解決するための一つの方途として、本稿では調査資料を開示と共有の手続きに着目し、民族誌編纂を支援するためのワークベンチとして公開可能なデジタルアーカイブを構築した。このアーカイブにおいては、調査者が保有する資料を客観情報として入力し、利用者がそれにコメントおよび解釈等の主観情報を付与することが可能である。これによって、これまで一方向的であった情報を相互に共有することが可能となり、多様な視点に立脚した民族誌を編纂することが期待できる。

Digital Workbench for Supporting Anthropological Studies

YASUNORI MOTOMURA,^{†1} AKIRA KAWAKAMI,^{†2}
KIYOSHI KAWAMURA,^{†3} JUN-YA MORISHITA^{†2} and MASAKAZU OSAKI^{†4}

Since the 1980s, the criticisms against the works on Social/Cultural Anthropology and Folklore have been aroused due to the researcher-centered interpretations of the target cultures/societies. However, no concrete methods for evaluating the researchers' interpretations seem to have been established. As one of the solutions to this problem, the authors have established a digital archives system to be utilized as a workbench for the researches in these fields. The system enables the general users to append the comments, interpretations, etc., in a subjective manner, to the original objective data provided by the researchers. By adopting this system, the construction of the ethnography reflecting various viewpoints, including those of the members of the target culture/society, could be expected.

1. はじめに

文化人類学や民俗学は、フィールドワークを基礎として、民族誌を編纂することを目的としてきた。しかし、1980年代以後、民族誌編纂をめぐる様々な論争がくりひろげられてきた。そこでの批判の焦点の一つとして、民族誌の記述が、人類学者の仮説や先入観によって「現地の立場」から大きく乖離してしまったという指摘がある。ここから、民族誌の資料の位置づけを再考し、それらを検証する作業の必要性が議論さ

れることになった。しかし、民族誌をめぐる様々な制約から、具体的なレベルで十分な検証を行うことは困難であった。ここでわれわれはこの問題に対処する一つの方途として、調査資料の開示と共有の手続きに着目するに至った。

コンピュータとネットワークの技術を利用することによって、調査者が収集した情報を開示し、コメントを付与することができれば、調査資料の妥当性を第三者が吟味することができる。そこで、デジタルアーカイブを人類学研究のワークベンチとして利用し、民族誌資料の公開と共有を可能とするシステムを提案する。

このアーカイブは、調査者が保有する民族誌資料を公開するのみならず、公開された資料に対し、利用者が自由にコメントを付与できるという機能を備える。これによって、これまで一方向的であった情報の流れを双方向的なものとし、利用者側からも積極的に民族誌の編纂に参画することができると考えられる。

本稿は次のような構成をとる。まず、従来の文化人

†1 関西大学 文学部

Faculty of Letters, Kansai University

†2 神戸大学 総合人間科学研究科

Graduate School of Cultural Studies and Human Science, Kobe University

†3 神戸学院大学

Center of Regional Card, Kobe Gakuin University

†4 姫路獨協大学 法学部

Faculty of Law, Himeji Dokkyo University

類学や民俗学における調査方法論を検討し、1980年代以後の民族誌批判の流れについて概観する。次にこのような批判を克服しようとする試みとして、資料の検証に関してなされた主要な議論を紹介し、それらの議論を基に問題解決の一つの方途となりうる研究モデルについての考察を行う。そして、被調査者や民族誌の読者にも閲覧可能な民族誌資料のデジタルアーカイブの構築について述べる。

2. 人類学の抱える問題点

2.1 調査資料データベースの不在

これまでの日本の人類学において、収集した調査資料を整理してデータ化したり、テーマごとに組織化するための方途については、ほとんど論じられてこなかった。このことは文化人類学というディシプリンの再生産にも関わる構造的な問題であるにも関わらず、多くの研究者たちは関心を示そうとしてこなかった。

だが、そのような状況はそれほど驚くに当たらないかもしれない。文化人類学においては、調査資料の取り扱いはおろか、どのような手順で調査を行い、どのようにして資料を収集するのかについてのマニュアル化の努力さえ、ほとんどなされてこなかったからである。この分野では、「とりあえず現場に行けば何かが見える」、「本で知った知識よりも現場の経験」といった経験主義、現場主義が主流となっており、調査資料の収集、整理、構築（データベース化）といったプロセスは、研究者の「職人技」に依存してきている。

この状況はフィールドワークを主体とする関連分野においてもそれほど大差ないといえる。統計手法に頼らず、文化人類学同様に民族誌データを重視する一部の社会学でも、フィールドワーク論が積極的に論じられ始めたのは、ようやくこの10年のことである。しかし、この分野におけるデータベース利用に関する議論が活発に行われているとはいえない状況にある。また、日本をフィールドとする民俗学でも、1987年に発行された『新版 民俗調査ハンドブック』¹⁾という調査マニュアルは存在するものの、得られた資料の扱い方についてはほとんど議論された形跡はない。そこでは聞き取り資料と文献資料などとの曖昧な接合が行われており、資料そのものの特質や資料間の質的な差異を明確化したうえで、検証を行おうとする視座は希薄であったといわざるを得ない。

しかも文化人類学においては、もう一つ厄介な問題が生じている。それは次にみる民族誌記述の正当性を問う一連の議論である。

2.2 民族誌記述の問題点

ライティング・カルチャー・ショックと呼ばれる出来事が、1980年代後半から90年代の初頭にかけて、アメリカでの人類学、民族誌批判を受けて引き起こされた²⁾³⁾。

民族誌の解釈学的転回とも呼ばれるこの一連の議論では、民族誌の記述が、これまで考えられていたように客観的で妥当なものであるどうか疑問符が付されていった。そこでは民族誌を記述する際に生じる記述するものとされるものとの非対称性が問題となり、他者を代弁する調査者の立場性が批判された。また、調査地の断片的な資料を整合的な民族誌へと構築する際の研究者の視点の偏りや恣意性と「現地の立場」からの乖離が厳しく指摘されることになった。さらに、本来は変動し続ける現地社会を、静態的で歴史性を欠いた「民族誌的現在」として研究者が記述してきたことが問題となっていた。

これらの議論は、調査の方法論や資料の扱い方といった実践的な側面よりも、イデオロジカルで思弁的な研究へとシフトしていくことになる。すなわち、その後で紹介されたオリエンタリズム批判や植民地主義批判へと議論が移行していくなかで、記述に潜む権力性や調査対象となる人々の研究者との非対称性を告発することが主要な論点となっていく。このような議論がきわめて重要な課題であることは疑いえないが、その立場を徹底するなら、研究者は調査対象となる他者について、いかなる表象も行うことが不可能になりかねない。

2.3 民族誌資料の検証の必要性

植民地主義批判や文化研究に対して、多くの文化人類学者たちは、もういちどフィールドワークの意義を問い直し、新たな民族誌の構築と異文化理解の可能性を探ってきた⁴⁾⁵⁾⁶⁾。しかし、これらの作業においても、依然として記述の内容、あるいは記述する際の資料の選択や分類、編集の過程についてはほとんど議論されていないように見える。そこで出現したいいくつかの優れた民族誌も、「職人技」からの脱却には至っていないわけである。

民族誌批判で大きく問題とされたことの一つに、肝心の民族誌が、記述の対象である当事者から受け入れられないという事態が生じていたのではなかっただろうか。そこでの乖離は、単に記述が事実からみて誤っているというレベル——しばしばこのレベルこそが、もっとも紛糾の的となることがある——から、調査地の事例の解釈を巡る齟齬、さらには民族誌記述に通底

する立場性の違いまで、様々な段階が考えられる。彼らが文化人類学の記述を批判する場合に——それが全面的な否定と拒絶であるならば確かに「対話」は不可能だろうが——、その批判の所在と根拠を最初に考えるべきだろう。つまり、民族誌が構築される過程で動員された調査資料そのものの検証に向かう必要が生じることになる。

また、研究者＝調査者の権力性が問題とされた場合にも、民族誌の構築過程のどのような面で権力性が行使されていたのかが問われるべきであろう。それが調査過程そのものに内在されているとしたならば、そこでも明らかにしなければならぬのは、調査のあり方や資料の収集状況、そして、調査資料の属性などである。常に「現地の立場」からの記述を標榜してきた文化人類学研究においては、このような現地からの異議申し立てについても、民族誌を巡る課題のなかで再度検討することが試みられるべきだろう。

ここで、文化人類学研究において、この問題意識を提示している二つの論考を参照したい。最初に紹介するのは、自らの民族誌記述の批判を行った栗本英世の論考である⁸⁾。彼は民族誌を「人類学的な知識の伝統と権威が創造され、再生産される場」と位置付ける。そのうえで民族誌記述にあたって、「フィールドワークの過程、調査者と対象との関係、データ収集の状況と方法」とともに、「いかなるレトリックを用いて民族誌を書きあげたのかといった問題」⁸⁾の重要性を指摘する。栗本はこのような研究が十分に議論されていないことを問題化しつつ、それを解決する「近道」は、「民族誌を書いた人類学者自身が、自省的に自分のテキストを検討すること」であると捉える。

そこで栗本が批判の対象とするのは、アフリカのスーダン南部に生活するパリという民族についての政治人類学的な民族誌である。この民族誌を再考することで彼は「自分が用いたレトリックやつじつま合わせに初めて気づき、そこに補足となる民族誌資料を提示したり、重層的な記述のあり方を模索していく。

一方、中川敏は、栗本とは異なる方向から議論を展開していく⁹⁾¹⁰⁾。中川は形式的な課題を定式化していきながら、それらに符合する民族誌記述の作法を継続している。彼の議論は現在進行中であり、容易な整理を許さないが、ここでは彼の議論の重要な部分を占める「規約」と「解釈」を巡る見解を紹介しておきたい。彼が「規約」と呼ぶのは、特定の共同体において当たり前のように執行されている行為や言明を支えている取り決め、あるいはルールに相当するものである。例えば、将棋において、飛車が縦横に移動し、角が斜め

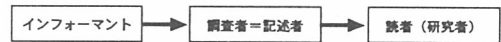


図 1 従来の民族誌の流れ

に移動するという取り決めは「規約」に他ならない。このような「規約」を現地において理解し記述することが民族誌の正しいあり方である、と中川は主張しているようにみえる。

それに対して「解釈」のレベルとは、いかなる文脈においても正当化されない記述である、というのがオースティンらの言語行為論を適用した中川の議論である。ここでも彼の議論を、彼自身が比喩的に語る将棋の事例で紹介しよう。ある局面における「3二金」から「2二金」への移動は、将棋のルールに則ったものであり、将棋の「規約」に従った「真」な振る舞いである。もし、ここで金が桂馬の動きをしたとするならば、それはあきらかに「規約」から逸脱しており、その記述は「偽」であることになる。その一方で、同じ「3二金」から「2二金」という手をみて、「急な攻めに出た」と記述する者がいるかもしれない。しかし、その記述の真偽を決定することはできない。実際にはそこから打ち手が攻勢に出て、勝負が早くつくかもしれないし、実はお互いが守りに入って勝負は長引くかもしれない。このような記述は、中川に言わせれば「解釈」に他ならない。そして「解釈」は「真偽」のいずれとも決定不可能な値をとるものであり、その結果、いかなる状況においても、記述を正当化することはできないというのである。

以上の二人の論者の議論を本論の問題意識に沿った形で整理していくことで、我々が目指すべき、デジタルアーカイブの範型を素描していくことにしたい。

2.4 民族誌記述の再構築

図 1 は、従来の一方向的な民族誌記述のあり方を示している。ここでは、調査者＝記述者とインフォーマント、読者は厳然と分割され、その情報の流れは一方向的であった。これに対して、栗本が行った議論は、図 2 のようにまとめることができる。

b の矢印の双方向性は、民族誌の調査者が、その民族誌を批判的に検討することで、記述者がそれらを再考する可能性を表している。しかし、ここで栗本のいう「近道」という設定に問題が生じる。彼は自らの民族誌批判を行うわけであるが、その作業は現地調査の一次資料と照らし合わせて初めて可能となる。しかも栗本は、これらの自己批判の傍証として、民族誌には

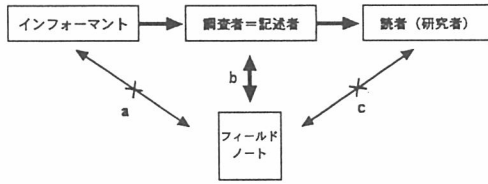


図2 民族誌の批判的検討

掲載しなかった資料さえ改めて紹介している。つまり、この作業は、読者と記述者が等号で結ばれる場合のみ可能となる作業であり、調査資料にコミットできない第三者が検証できる性質のものではないのである。このような自己点検のみに依存することで民族誌記述の課題は解消されるのか否かについては疑問が残る。彼のこの論文以後、そのような自省的な論文がほとんど見られないことも、このような自己批判のあり方の限界を示すものであるのかもしれない。

一方、中川の議論を暫定的に整理したものが図3である。中川の記述に従えば、「規約」とは第三者がみても「真」と判断できるものである。そこに民族誌を読んだ読者と現地の人々との本質的な違いはない。このような規約の提示は（あるいは規約に則った民族誌資料の提示）は、現地の人々と読者とを媒介するものともなりうる。ただ、ここでそれらのラインを破線で記したのは、それらが現実的には民族誌のなかに見いだされるに過ぎず、概念的な存在のままであることを示している。中川は民族誌の記述内容のあるべき形式を提唱しながら、その具体的な方途については十分な議論を進めていないといえる。

また、肝心の「規約」概念についても疑問が残る。彼の将棋の例からも分かるように、金がどのような動きが可能であるかは、一度の対局をみただけでは理解できない可能性がある。つまり、「規約」とは、普段の生活では意識化されにくく、文化に内属している限りは理解できないものなのである。おそらく調査者は、被調査者と生活の諸相をともしていくなかで、経験的に「規約」の所在を知ることになるはずである。だが、仮にこのような過程が検証されないならば、民族誌に提示された「規約」も、調査者の恣意的な「解釈」である可能性を否定できない。

ここで「規約」は、現地の人々の背後に想定されるのではなく、フィールドワークにおいて現地の人々との交渉によって共有されるものなから、抽出されるものであるという点がポイントとなる。ただし、ここでも読者は、民族誌の記述内容から「規約」の存在の可能性が提示されるのみであり、調査者が自分に都合

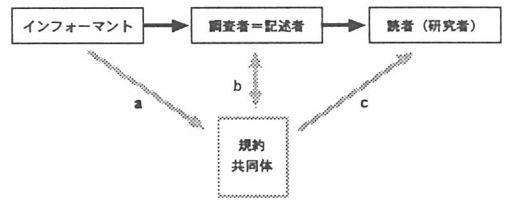


図3 規約に焦点化した民族誌の記述

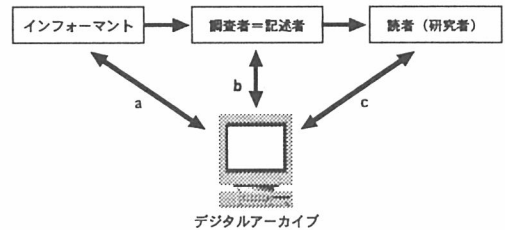


図4 デジタルワークベンチを介した双方向的な民族誌の検証

のいい資料を提示し、それらから恣意的に「規約」を抽出している可能性は否定できないわけである。

この両者の議論を踏まえるならば、それぞれの課題が、民族誌としての記述のあり方と自らの調査資料との乖離をどのように埋めていくのかという問題に行き着くことになる。もちろん、資料の開示が全てを解決するわけではない。しかし、栗本や中川の議論によって構築された民族誌記述の活性化に向けての議論をブラックボックスへと回帰させないためにも、このような調査資料の組織化とそれらを参照した民族誌の再検証は、必要不可欠な作業であると考えられる。

これを図示したのが、図4である。この図では、デジタルアーカイブの公開によって、民族誌資料が検証可能となることが期待できる。まず、bの双方向矢印は、調査者自身が資料の再検証を行うことを表している。また、cの双方向矢印は、読者による資料の閲覧と資料に対するコメントを表している。さらに、aの双方向矢印は、被調査者自身が民族誌資料に対する閲覧とコメントを表しており、これによって被調査者が立場性を主張する機会が確保される。このことは、『ライティング・カルチャー』以来、主張はされながら実験的な民族誌を除いては、実現していない課題と結びつく可能性がある。

3. デジタルアーカイブの概要

3.1 システム構成

民族誌資料を公開して検証可能とするためには、調査者による資料の入力と閲覧が可能だけでなく、

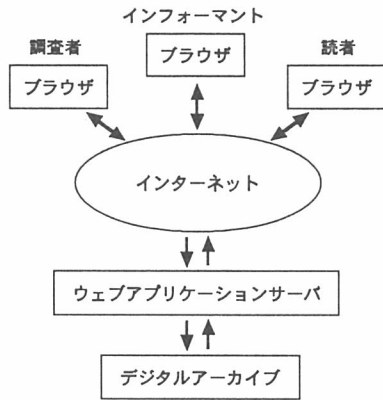


図 5 システム構成図

インフォーマントと読者が遠隔地から容易に閲覧し評価することができる機能を持ったデジタルアーカイブが必要である。このため、利用者がウェブブラウザを用いてインターネット経由でアクセス可能なアーカイブを構築した。図 5 にこのシステムの構成図を示す。

3.2 データ構造

図 6 はデジタルアーカイブのデータ構造を示したものである。データを格納する単位は、資料を格納するオリジナルデータ部とそれに添付するコメントデータ部から構成される。このデータ単位は、オリジナルデータを核とし、コメントデータを可変的な属性として付加することによって、非定型なデータ構造を実現している。

オリジナルデータはフィールドワークによって得られた資料を定型化して入力したものである。これは、タイトル、取得日時と場所、調査名、著作権等(客観情報)である。コメントデータは[視点, 属性, 値]の3つの属性からなり、それぞれ可変長のテキストデータである。ここにはオリジナルデータに付随する形で、調査者が追加した評価(主観情報)および他の利用者(インフォーマントと読者)による評価が格納される。これによって、オリジナルデータには変更を加えずに、レコードに付随するデータを更新することが可能となる。

また、オリジナルデータの作成者は、資料をデジタルアーカイブに格納する際に、オリジナルデータには格納できない非定型のデータを[属性, 値]の組として、コメントデータに付与することができる。ここで、コメントデータの[属性]には、オリジナルデータには設定できなかった属性を自由に与えることになる。

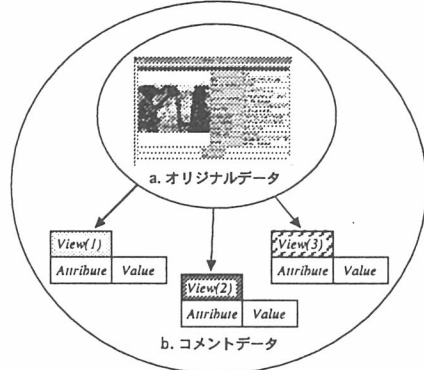


図 6 デジタルアーカイブのデータ構造

3.3 データ間の関連付け

さらに、本システムではオリジナルデータとコメントデータ同士は関連付けられ、横断的に閲覧可能としている。この様子を図 7 に示す。利用者はコメントデータの[値]の任意の箇所に、他のオリジナルデータへのリンクを作成することが可能である。これにより、調査者のみならず他の利用者が民族誌を構築して行く過程をアーカイブ内で実現できる。まず、利用者は当該データから関連データをリンクをたどることによって、調査者による民族誌の編纂過程を検証することが可能となる。また、利用者はオリジナルデータに何らかのコメントを付与することができるが、その際にもコメントからオリジナルデータへのリンクを設定することが可能である。このように、データ間をリンクで結び付ける機能を備えることによって、アーカイブ内の各データが有機的に結合され、共有された情報に対するさらなる検証が期待できる。

データ間をリンクによって接続することは、検索される情報の交錯や混乱を招く危険性が考えられるが、キーワード検索では得にくい情報をリンクによって補うことができるという利点がある。キーワード検索のみを用いた場合、アーカイブの保有するデータの増加に従って結果として返される件数は増加する。しかし、検索結果の中には利用者が欲する情報とは合致しないものが非常に多く含まれている場合が多い。これはキーワードとなる語彙が内包する意味が一意ではないことが圧倒的に多いことに起因する。このことから、結果として返された情報を氾濫しに閲覧することは現実的ではなく、故に利用者の必要とする情報を包括的に提示することは困難である。一方、ハイパーリンクによるデータ間の接続が可能であれば、キーワード検索によりある程度の絞り込みを行い、ひとたび検索対

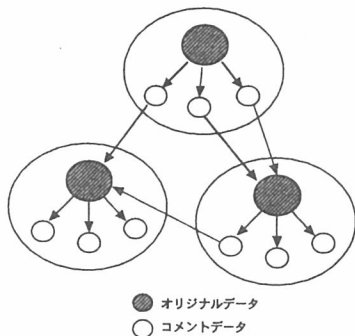


図7 データ間のリンク

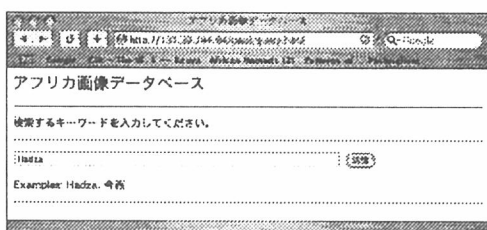


図8 フリーワード検索

象に合致するレコードを見つけることが出来れば、そのレコードに張られているリンクを辿ることにより、検索対象に関連性のより深い情報を得ることが可能である。その過程はキーワード検索のみに依存したシステムより迅速かつ的確に目的とする情報を得る手段としてはより有効であると考えられる。

4. デジタルアーカイブの利用

このアーカイブを利用するためには、まず利用者登録を行う。この利用者情報は利用時に利用者名とパスワードによって認証される。利用者がコメントデータを追加する際には、その利用者名が視点情報としてコメントデータに格納される。

4.1 資料の検索

資料の検索は、フリーワード検索によって行う(図8)。利用者は、入力欄に空白で区切った複数の単語を入力することによって検索を行う。図の例では、キーワードとして"Hadza"という単語を1語入力している。

フリーワード検索は、オリジナルデータとコメントデータの全フィールドに対してキーワード検索が行われる。検索結果は、オリジナルデータのリストとして表示される。ここでコメントデータ中に検索語がヒットした場合においても、それにリンクされているオリジ

ID	Country	Title	Place	Date	Description	Photo
504	Tanzania	ハッザとイランズーの男	エヤン湖Lake Eyasi, エンドマーJi Endomaga	1970年	石ハッザHadzaの男と左イランズーIsanzuの男	
572	Tanzania	ハッザ族の男	エヤン湖Lake Eyasi	1983年	ハッザHadza族の男	
573	Tanzania	ハッザ族の男	エヤン湖Lake Eyasi	1983年	ハッザHadza族の男	

図9 検索結果の表示

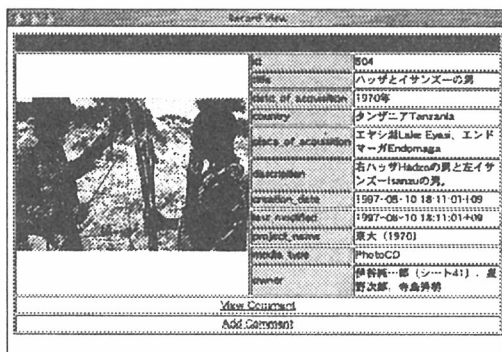


図10 レコード表示

ナルデータが表示される。オリジナルデータが表示される際のフィールド値は、画面が煩雑にならないように、最小限の客観情報のみである。図9は、"Hadza"という単語を含むレコードをリスト表示したものである。今後は、オリジナルデータあるいは評価データのみに対する検索も検討中であり、検索結果を評価データだけのリストとして表示することも予定している。より詳細な情報を閲覧したい場合は、リスト中のレコードをクリックすることによって、レコード表示を閲覧する。

図10は、レコード表示画面である。ここでは、オリジナルデータの全ての属性を表示している。

4.2 コメントの閲覧と添付

検索によって得られたリストの一つをクリックすると、レコード表示ウィンドウが開き、より詳細な属性が表示される(図10)。レコード表示ウィンドウには、コメントデータを閲覧可能なリンクを含んでおり、これをクリックすることによって、該当レコードに付与されているコメントのリストを閲覧することができる(図12)。また、レコード表示ウィンドウにはレコードに対するコメントデータを付与するためのリンク



図 11 コメントの入力画面

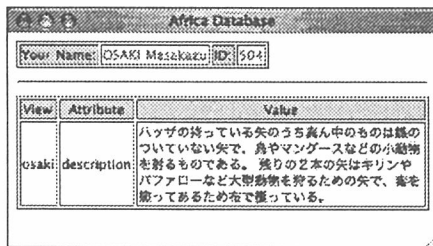


図 12 コメントの閲覧

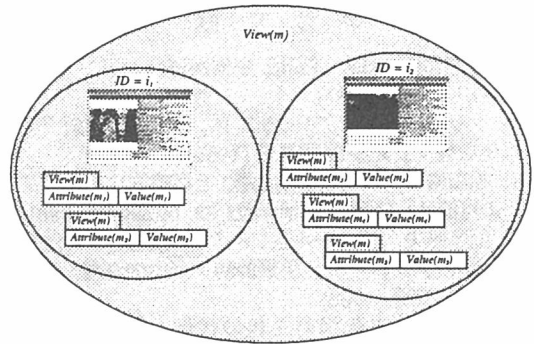


図 13 視点モード

5. おわりに

人類学で利用することのできる公開可能なデジタルアーカイブを構築した。このアーカイブは、入力された資料に対して繰り返し再評価がなされることによって、様々な解釈を許容しながらも、客観性と公共性を高めながら、オープンな研究支援環境として発展して行くことが期待できる。

今後の課題としては、検索時の容易なインタフェースを検討する必要がある。また、検索結果をオリジナルデータのリストだけではなく、コメントデータのリストとして表示したり、視点による表示が可能となるように改良して行く予定である。

なお、今回格納したデータは、伊谷純一郎京都大学名誉教授・神戸学院大学名誉教授(1926-2001)による1958年から1979年までのアフリカでの調査の記録で、この一連の調査は日本のアフリカにおける霊長類学や人類学調査の出発点となったものである。

謝辞 姫路獨協大学経済情報学部杉山武司教授にはWeb Applicationの開発について貴重な助言をいただいた。本研究のデータとして、伊谷純一郎京都大学・神戸学院大学名誉教授が残された写真とそのコメントを利用させていただいた。林原自然科学博物館附属類人猿研究センター長伊谷原一博士からは、これらの資料の提供していただいた。姫路獨協大学法学部星野次郎助教授は、伊谷純一郎先生の残された写真とコメントをデジタル化と入力に携わっていただいた。本研究は神戸学院大学地域研究センター(学術フロンティア人類学班)の研究の一環として推進したものである。また、この研究は関西大学学部共同研究費(2002年度)の助成を受けている。

(Add Comment)を含んでおり、これをクリックすることによって、コメントデータ添付ウィンドウが開き、コメントの入力が可能となる(図11)。コメントデータとしては、添付する内容(Value)とそれに関する属性値(Attribute)を入力することができる。コメントデータから任意のオリジナルデータへのリンクは、コメントの中に"ID=n"と入力することによって可能としている。ここで、nはオリジナルデータのレコード番号を指定する。

4.3 「視点」と「トピック」

このデジタルアーカイブは、視点モードとトピックモードによる閲覧が可能である。視点モードとは、特定の利用者が付与したコメントデータの視点情報をもとに、アーカイブ内のデータを閲覧するモードである。これを図13に示す。視点モードによって得られたレコード群もオリジナルデータのレコードのリストとして表示し、閲覧する。また、トピックモードとは、コメントデータの属性情報から特定のトピックを検索し、データを閲覧することができる。これらを組み合わせることにより、「誰(視点)が何(トピック)に関する情報を操作した」という概念で閲覧できる。将来的には、この視点とトピックの組をコメントデータが付与された日時と共にデータとしてアーカイブに格納し、履歴として参照可能にすることを検討している。

参 考 文 献

- 1) 上野和男 他編, 『新版 民俗調査ハンドブック』吉川弘文館 (1987).
- 2) クリフォード J, マーカス F., 春日直樹他訳『文化を書く』紀伊国屋書店 (1996).
- 3) 松田素二, 「『人類学の危機』と戦略的リアリズムの可能性」『社会人類学年報』22, pp.23-48(1996).
- 4) 関本照夫, 「フィールドワークの認識論」『文化人類学のアプローチ』伊藤幹治・米山俊直編, ミネルヴァ書房 (1988).
- 5) 浜本満, 「文化相対主義の代価」『理想』627, pp.105-121(1985).
- 6) 浜本満, 「差異のとらえかた——相対主義と普遍主義——」『思想化される周辺社会 岩波講座人類学』12 巻、清水昭俊編, pp.69-96(1996).
- 7) 森下淳也他, 「データベースに基づく学術研究支援システム —木簡データベースの構築について—」, 人文学と情報処理 No.19, pp.37-42(1999).
- 8) 栗本英世, 「フィールドワークの経験と民族誌を書くということ」『文化を読む』谷泰編, 18-45, 人文書院 (1991).
- 9) 中川敏, 民族誌的真理について『現代人類学を学ぶ人のために』米山俊直編, 248-263, 世界思想社 (1995).
- 10) 中川敏, 「オリエンタリズムと数学の直観主義」『社会人類学年報』22, 1-21(1996).